

イエスご自身が近づいて来て

ルカ 24 : 13 - 35



司祭 ヨハネ 井田 泉

2017年4月30日

復活節第3主日

奈良基督教会にて

二人の人が遠い山道を下って行きます。日曜日の午後です。二人は、悲しみと困惑と恐怖の入り交じった思いで道を急いでいます。

悲しみというのは、もっとも大切な人、主イエスを失ったからです。このイエスを信じ、このイエスにのみ希望を託し、頼りにしてきたのに、無残にもイエスは一昨日の金曜日、十字架にかけられて殺されました。イエスを失ったことはすべてを失ったことでした。

困惑というのは、今朝聞いたことです。仲間の女の人たちが朝早くにイエスの墓に行ったところ、イエスの遺体がなくなっていた。そして天使が現れて彼女らに、「イエスは生きておられる」と告げた、というのです。いったいどういうことなのか。いくら考えても議論してもわかりません。

恐怖というのは、エルサレムにいるのがこわかったのです。イエスを捕らえて十字架にかけた者たちが、イエスの弟子である自分たちを同じような目に遭わせるのではないか。そう思うと恐怖に耐えられず、仲間の弟子たちを残して二人はエルサレムを脱出し、おそらく彼らの家のあったエマオの村に向かったのです。追っ手が来るのではないか。何度も息を殺すようにして後ろを窺いました。でももう大丈夫のようです。エルサレムから相当離れたし、だれも追ってくる気配はありません。

「ちょうどこの日、二人の弟子が、エルサレムから六十スタディオンの距離離れたエマオという村へ向かって歩きながら、この一切の出来事について話し合っていた。話し合い論じていると、イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた。しかし、二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった。」ルカ 24:13-16

今日大切に心にとめたいのは、この二人に「イエス御自身が近づいて来」られた、と書いてあることです。

二人がイエスを想像したというわけではありません。イエスがここに来てくださったらどんなによいかと心のうちに願った、というわけではありません。事実「イエス御自身が」、イエス御自身が近づいて来られたのです。

わたしたちが見失いがちなことはこのことです。わたしたちは自分の信仰と不信仰にとらわれます。自分の働きと無力、自分の成功と失敗や行き詰まりが気になって、そこから抜け出せなくなることがあります。けれども聖書は、イエスご自身が働かれる、イエスご自身がこのわたしたちに近づいて来てくださる、と告げるのです。

道連れになった二人とイエス。しかし二人はそれがイエスであるとは気づきません。二人はそれとは知らないままイエスに、この数日の間に自分たちが経験したことを話します。自分たちの悲しみと困惑と恐怖を話します。イエスはそれにじっと耳を傾けて聞かれます。

イエスは弟子たちの悲しみを深く感じ、弟子たちの困惑を深く理解し、彼らの陥った恐怖もよくわかります。

しかしそれで終わりではありません。イエスは弟子たちの悲しみと困惑と恐怖をよく理解し感じつつも、そこに留まってほしくない。

わたしが生きているのに、何を悲しむ必要があるのか。どうして困惑と恐怖のうちにとどまることがあるのか。

けれどもイエスはすぐにご自分を現さず、聖書を説き明かしていかれます。聖書の中に救い主を、ご自分を見出してほしいと願われるのです。

「そこで、イエスは言われた。

『ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。』

そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわた

り、御自分について書かれていることを説明された。」ルカ
24:25-27

イエスが聖書を説明していかれるにつれて、二人は次第に、イエスの苦難と十字架の死の意味を理解しはじめました。ただ悲惨と絶望と悲しみでしかなかったイエスの十字架が、深い慰めと意味をもって迫ってくるのを感じました。悲しみの奥に喜びが起こり、困惑を取り除く光が差し、恐怖は平安に変えられていきました。

生前のイエスの教えと働きが新しい力を持ってくるようです。イエスが教えられたこと、自分たちが目撃したこと、経験したことがよみがえってきます。

こうして山道を歩きながら自分たちのことを話し、次には歩きながらその人の話を聞いて、何時間たったでしょうか。日が西に傾く頃、ようやく目的のエマオに到着しました。その人はなお先に行く様子だったので、二人は無理に引き留めてその人を家に招き入れました。

「一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」ルカ 24:29

続きを読みましょう。

「一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。二人は、『道で話しておられるとき、また聖書を説明して下さったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか』と語り合った。」ルカ 24:30-32

十字架に死なれたイエスは、生きておられます。復活のイエスは、みずからわたしたちに近づいてこられます。

わたしたちの迷いの時、嘆きのとき、疑いの時、イエスはわたしたちを見捨てられない。そのわたしたちのためにイエスご自身がわたしたちに近づいてくださって、わたしたちとともに歩んでくださるのです。

わたしたちはあの二人の弟子たちのように、悲しみと嘆きと疑問を主イエスに訴えてよい。イエスは耳を傾けて聞いてくださるのですから、すべてを打ち明けて聞いていただくのです。悲しみも困惑も、恐れも行き詰まりも。イエスは聞いてくださいます。

けれども次の段階があります。わたしたちのことを親身になって聞いてくださる方は、わたしたちのために聖書を開いて、わたしたちの心に、その意味を説き明かしてくださるのです。

今度はわたしたちが耳を傾ける番です。

そしてこの方は、わたしたちの集いの中心となって、わたしたちのために祈ってパンを裂いてくださいます。パンを分かち与えてくださいます。

イエスが食前の感謝の祈りをしてくださるだけではなく、一緒にいただくパンをとおして、イエスはご自身の愛の命を提供してくださる。これが聖餐式です。

エマオの弟子の話はこれで終わりではありません。

イエスが生きておられることをはっきり認識した二人は、イエスが生きておられることの喜びをエルサレムに残っている弟子たちに伝えるために、夜の道をエルサレムに戻っていきます。悲しみと困惑と恐怖は取り去られて、喜びと確信と平安が二人足を運んでいきます。

「そして、時を移さず出発して、エルサレムに戻ってみると、十一人とその仲間が集まって、本当に主は復活して、シモンに現れたと言っていた。二人も、道で起こったことや、パンを裂いてくださったときにイエスだと分かった次第を話した。」ルカ 24:33-35

祈ります。

主イエスさま、あなたがあの二人の弟子たちに近づかれたように、わたしたちにも近づいてください。わたしたちの嘆きの訴えをお聞きください。わたしたちを教えて、聖書のうちにあなたを見出せるようにしてください。あなたが生きておられることを示してください。あなたがわたしたちをけっして見捨てず、命を与えてくださることを信じます。アーメン